法華経の Saṃdhābhāṣya に就いて

松　濤　誠　廉

一　序

ケルンはその英訳法華経では、ビュルヌフがこの saṃdhābhāṣya の言葉を langage énigmatique（謎の言葉）と訳していることを認めつつ、彼自身の訳では一貫して mystery の語で訳し通している。しかし、かく訳しつつも彼にはなお疑問があって、mantra と殆んど同じ言葉ではないかとしているなど、苦悩のあとが見えている。（同訳五九頁下註参照）エジャトンは fundamental, real meaning とか、仏が実際に意図した言葉 The Lord's words as He really intended them (esoterically, cryptically) 等、色々の意味にとるが、大体から言って欧米の学者は saṃdhā-bhāṣya 等の語学的意味を基礎とし、これにその言葉の用いられている文の前後関係からその意味を推測し、さらに一方西蔵訳を参照しているのである。

この研究方法は勿論必要なことであるが、これだけでは完全な方法ではない。saṃdhā- の語学的意味だけを見ても、前置辞 sam- と語根 dhā- から成っていることはすべての研究者に異論が無いとしても、それから派生する意味は、結合、和合、和解、状態、約束、意図、限界、定着等、驚くべき数にのぼり、文全体の前後関係から見て適当な意味を選び出すことも容易ではない。そのため著者の真意を正しく汲む事が困難になり、訳者の考えが入り過ぎて誤りとなる恐れがあり、また、誤った先入観に煩わされる危険もある。ことに法華経に限らず西蔵訳一般からの資料を用いる時にはその印度密教的解釈と混同しないようにせねばならない。

もし幸いにして原文の中にその問題の言葉が明瞭に規定してあれば、それに依れば良いのであるが、この法華経の saṃdhā-bhāṣya のようにそれが殆んど見当らない場合にはそれも出来ない。然し幸いにして竺法護、羅什の漢訳があって、年代としても古い資料で、従ってその中に或いはそれ以前からの訳に就いての伝統が伝わって

いるかも知れぬし、たとえそう云うものが無くとも、この両訳は古い真剣な労作として充分に参考する価値のあることは、誰しも認めざるを得ぬであろう。以下 saṃdhā-bhāṣya 並びにこれに類する言葉が出て来る文章をケルン本から引き出して、法護、羅什の両巨匠がどう取り扱っているかを見極めて見たい。

このような研究に就いては、先ず第一にケルン本が適当かどうかの問題がある。即ち現存の写本の種類が多いことと、法護等が用いた写本がケルン本と完全に同じであったかどうかと云うことであるが、大体から言って夫々の写本の有する誤写は別問題として、相違の問題は語学的なもので、内容から見ればどんな写本も皆な大体同じであると言い得るから、目下のところ最も広く用いられている版本はケルン本であるので、これを用いることにする。また、正法華は我々の研究所で野村教授の責任のもとに研究されていて今までに大きな成果を挙げているが、未だ公開されていないので、これを利用することは不可能である。従って、此処では自分の当て推量で読んで行くよりほかに方法がない。それで此の点誤りも多いであろうが、あらかじめ読者の寛恕を願う次第である。

二　原文と法護・羅什訳との比較

法華経には saṃdhā-bhāṣya に類する言葉として saṃdhā-vacana, saṃdhā-bhāṣita があるが、念の為これ等を別々に取扱って、Skt. 本に出て来る順序に従って検討して見る。

A. Saṃdhā-bhāṣya

㈠　Ⅱ方便品。ケルン本二九頁に「悟られた諸如来・阿羅漢・正覚者の仏智（Buddha-jñāna）はすべての声聞・縁覚たちには知り難いものである」と説いたすぐ後に、

durvijñeyaṃ śāriputra saṃdhābhāṣyaṃ tathāgatānām arhatāṃ samyaksaṃbuddhānām / tat kasya hetoḥ / sva-pratyayān dharmān prakāśayanti vividhôpāya-kauśalya-jñāna-darśana-hetu-kāraṇa-nirdeśan'ārambaṇa-nirukti-prajñaptibhis tais tair upāya-kauśalyais tasmiṃs tasmiṃ lagnān sattvān pramocayitum /

試　訳

諸々の如来・阿羅漢・正覚者の saṃdhā-bhāṣya は知り難いものである。何故ならば、自己を縁とする（ケルン訳―原因をそれ自身のうちにもつ）諸々の法を（仏たちは）明らかにする。（すなわち）種々異なる善巧方便・智見・因縁・宣説・所縁・解釈・施設を用いて、それぞれの善巧方便を用いて、それぞれのことがらに執着している衆生を解脱させるために、（諸法を明かされるからである。）

羅什は原文を直訳せず、文の前後を組み合せて自由に訳している。即ち、

大正九・五c

（成二就甚深　未曾有法一）　随レ宜所レ説　意趣難レ解　（舎利弗吾従二成仏一已来）種種因縁　種種譬喩　広演二言教一　無数方便引二導衆生一　令レ離二諸著一。

法護は原文からかなり離れ、その代りに我々の問題である saṃdhā-bhāṣya を丁寧に述べてその意味を教えているようである。即ち、

大正九・六八a

又舎利弗　如来観二察　人所縁起一*　善権二方便一　随レ誼順導猗二靡現慧一　各為二分別一　而散二法誼一　用度二群生一。

（*人所縁起は原文 sva-pratyayān dharmān の訳か。）

羅什の「宜」と法護の「誼」とは同意義で「よろしき」と読むべきであろう。現慧は衆生の持つ現在の智であろう。散は散布の意味。善権方便と saṃdhā-bhaṣya との関係は後に引用する Skt. 原文にも出て来る。要するに此の語は、仏が衆生などの状態或いは現状を見て、これにあわせて説く言葉或いは教理で、仏智を実智とすればこれは権智となる。（島地大等著　妙法蓮華経　三九頁参照）即ち saṃdhā-bhāṣya は仏智とは明瞭に区別さるべきものである。什訳にある意趣（こころばせ）は saṃdhā にある意図の意味を匂わせているかのようにも見えるが、なお不明である。然し、これをもって saṃdhā-bhāṣya と abhiprāya（四意趣）とを関係づけることもなお早計であろう。（H ジャトン辞書五五六頁 Saṃdhā の項参照）

要するに羅什の随宜と云う訳語は、若し彼に直接伝わるものでなければ、恐らくは法護のこの個所に依っているものとする事が出来よう。そしてこう訳すことによって、此の言葉は法華経の爾前の教・唯有一乗等の思想と関連することになるのである。

（この個所は世親の法華経論に引用してあるが菩提流支の訳（続蔵二二套第三、二三左下）には「舎利弗難解法者　諸仏如来随宜所説　意趣難解」とあり、同論の勒那摩提訳も同じ。以上中村瑞隆教授の御教示により追加する。法護、羅什の訳風が伝っているのを知る。）

㈡　Ⅱ方便品。ケルン本三四頁一行、坂本上七六頁。舎利弗の言葉として、

ko bhagavan hetuḥ kaḥ pratyayo yad bhagavān adhimā=
traṃ punaḥ punas tathāgatānām upāya-kauśalya-jñāna-da=
rśana-dharma-deśanāṃ saṃvarṇayati / gambhīraś ca me
dharmo 'bhisaṃbuddha iti / durvijñeyaṃ ca saṃdhā-bhā=
ṣyam iti punaḥ punaḥ saṃvarṇayati / na ca me bhagavato
'ntikād evaṃ-rūpo dharma-paryāyaḥ śruta-pūrvaḥ / imāś
ca bhagavaṃś catasraḥ parṣado vicikitsā-kathaṃkathā-
prāptās tat sādhu bhagavān nirdiśatu yat saṃdhāya tathā=
gato gambhīrasya tathāgata-dharmasya punaḥ punaḥ
saṃvarṇām karoti //

試　訳

世尊よ。何が因、何が縁で世尊は大いに繰返し繰返し如来たちの善巧方便・智見・説法を賞め讃えられるのですか。『私の覚った法は深遠である』と言い、また、『saṃdhā-bhāṣya も知り難いものである』と繰返し繰返し賞め讃えられるのですか。また私も世尊の許でこのような法門は以前に承ったことはありません。また、世尊よ、これら四衆の者たちは疑惑や疑問に当面しております。どうぞ世尊は、それに関連して（yat saṃdhāya）如来が如来の深遠な法を幾度も幾度も称讃なさる、その事柄に就いてお説き下さい。（あとの saṃdhāya は軽い意味で用いられている。）

什訳　大正九・六b

世尊　何因何縁　慇懃称歎　諸仏第一方便　甚深微妙　難解之法　我自昔来　未曾従仏　聞如是説　今者四衆　咸皆有疑　唯願世尊　敷演斯事　世尊何故　慇懃称歎　甚深微妙難解之法。

原文と比較することに依って、この訳文中の第一方便は saṃdhā-bhāṣya と見、甚深微妙難解之法は仏の覚られた深法と見るべきか、或いは後者は略したのか明瞭ではない。

法護訳　大正九・六八c

唯然世尊　今日如来　何故独宣　善権方便　以深妙法　逮最正覚　道徳巍巍　不可称限。

法訳の方が問題の両者の区分が明瞭である。この個所より漢訳六行ほど前に saṃdhā-bhāṣya の語は無いが、千二百人の声聞たちの疑惑を述べているところがあって、此の方が両者の区別が明瞭で重要である。その原文と什訳とは次の通りである。

(Kern ed. p. 33–7) ko nu hetuḥ kiṃ kāraṇaṃ yad bhagavān adhimātram upāya-kauśalyaṃ tathāgatānāṃ saṃvarṇayati / gambhīraś câyam mayā dharmo 'bhisaṃbuddha iti saṃva=rṇayati / durvijñeyaś ca sarva-śrāvaka-pratyekabuddhair iti saṃvarṇayati /

大正九・六b

今者世尊　何故慇懃　称歎方便　而作是言　仏所得法　甚深難解　有所言説　意趣難知　一切声聞辟支仏　所不能及。

ここで重要なことは、普通 saṃdhā-bhāṣya とあるべきところを善巧方便（upāya-kauśalya）を用いている事で、Skt. 原文に於いても善巧方便の説法内容と saṃdhā-bhāṣya は同じものであると見ていることになる。

㈢　Ⅱ方便品。ケルン本三四頁九行、坂本上七八頁。舎利弗が仏に説く偈文中に

bodhi-maṇḍaṃ ca kīrtesi pṛcchakas te na vidyate / saṃdhā-bhāṣyaṃ ca kīrtesi na ca tvāṃ kaś ci pṛcchati //

試訳

あなたは菩提道場を称たえられるのに、あなたに問う者はない。また、saṃdhā-bhāṣya をあなたは称たえられるのに、あなたに誰も尋ねません。

什訳　大正九・六b

道場所得法　無能発問者

我意難可測　亦無能問者

什は此処でも saṃdhā-bhāṣya のなかに「意」の意味を見ている事がわかる。（前出、ケルン本三三頁七行の什訳参照）

法訳　大正九・六八c

讃揚仏道場　無敢発問者

独諮嗟真法　無能啓微妙

saṃdhā-bhāṣya を真法と訳しているが、説法としての真法で、仏智の意味ではないであろう。

㈣　Ⅲ譬喩品。ケルン本六〇頁九行、坂本上一三六頁。世尊に対する舎利弗の言葉として、世尊が自分達を劣乗で出離させたことを自分は思い煩らっていたが、

evaṃ ca me bhagavaṃs tasmin samaye bhavaty asmākam eva̍iṣo 'parādho na̍iva bhagavato 'parādhaḥ / tat kasya hetoḥ / saced bhagavān asmābhiḥ pratikṣitaḥ syāt sāmu=tkarṣikīṃ dharma-deśanāṃ kathayamāno yad idam anutta=rāṃ samyaksaṃbodhim ārabhya teṣv eva vayaṃ bhagavan dharmeṣu niryātāḥ syāma / yat punar bhagavann asmābhir anupasthiteṣu bodhisattveṣu saṃdhā-bhāṣyaṃ bhagavato 'jñānamānais tvaramāṇaiḥ prathama-bhāṣitaiva tathāgata=sya dharma-deśanā śrutvôdgṛhitā dhāritā bhāvitā cintitā manasikṛtā, so 'haṃ bhagavann ātma-paribhāṣaṇayaiva bhūyiṣṭhena rātriṃ-divāny atināmayāmi /

試訳

また、その時に世尊よ。こう云う考えが私に起りました。「これは私たちの罪であって、世尊の罪ではない」と。何故なれば、若し私たちが世尊に御期待したなら、（世尊は）人を向上させる説法を、即ち、無上の正菩提に就いて述べられて、私達は、世尊よ、それらの法で出離したでしょうから。それであるのに、世尊よ、私たちは菩薩たちが側らに居ない時に、世尊の saṃ=dhā-bhāṣya の事を知らずに、急いで、最初に説かれた如来の説法を聞いて、これを取り、受け、修し、考え、意ろに想いとどめたので、その私は、世尊よ、自分を非難する事で、大部分、昼夜を過ごして来ました。

什訳から必要な個所だけを取れば、

大正九・一〇c

然我等不〻解〼方便　随宜所説、　初聞〼仏法、　遇便信受　思惟取〻証。

とあって、原文にない「方便」の語を入れて意味を明瞭にしている。法訳は原文から外れていて、saṃdhā-bhāṣya の訳語と見られるものも無いので略す。

(五) Ⅲ譬喩品。ケルン本七〇頁三行、坂本上一五六頁。神々の言葉として、

bahu-dharmaḥ śruto 'smābhir loka-nāthasya saṃmukham/
na câyam īdṛśo dharmaḥ śruta-pūrvaḥ kadā cana //35//
anumodāma mahāvīra saṃdhā-bhāṣyaṃ maharṣiṇām /
yathâryo vyākṛto hy eṣa śāriputro viśāradaḥ //36//
vayam apy edṛśāḥ syāmo buddhā loke anuttarāḥ /
saṃdhā-bhāṣyeṇa deśento buddha-bodhim anuttarām//37//

試　訳

私共は世間の守護者の面前で沢山の法を聞きましたが、このような法（教え）は以前に承った時はありません。（三五）

大雄よ。大仙がたの saṃdhā-bhāṣya に私共は随喜します。ちょうど授記された此の無畏である尊い舎利弗のように、（三六）

私たちもまた、世の中で最高のこのような仏になるでしょう。（そして）saṃdhā-bhāṣya に依って最高の、仏陀の覚りを説いているでしょう。（三七）

什訳　大正九・一二a

我等従昔来　数聞世尊説
未曾聞如是　深妙之上法
世尊説是法　我等皆随喜
大智舎利弗　今得受尊記
我等亦如是　必当得作仏
於一切世間　最尊無有上
仏道巨思議　方便随宜説

法訳は原文から離れている。この偈の訳の最後の「願獲仏道誼」が saṃdhā-bhāṣya の影を見せていると言い得よう。ここでも羅什は原文に無い「方便」の語を加えて意味を明らかにしている。

(六) Ⅻ勧持品。ケルン本二七三頁一三行、坂本中二三八頁。菩薩たちが世尊に対して述べる偈として、

bhagavān eva jānīte yādṛśāḥ pāpa-bhikṣavaḥ /
paścime kāli bheṣyanti saṃdhā-bhāṣya-m-ajānakāḥ //16//

試　訳

世尊こそが、後ちの時代に saṃdhā-bhāṣya を知らない此のような悪比丘たちがいることを知っておられます。

什訳　大正九・三六c

世尊自当レ知　濁世悪比丘
不レ知ニ仏方便　随宜所説法一

法訳　大正九・一〇七b

世尊具知レ之　如是悪比丘

然後来未世　当=分別開解=

法訳中、「当分別開解」は原文に当らないようである。ここでも羅什は特に方便の語を加えて意味を明瞭にしている。

B. Saṃdhā-bhāṣita

この語は本来過去分詞であるが、法華経中にはそのまま名詞として saṃdhā-bhāṣya と同意義に用いられている。

(一) V薬草品。ケルン本一二四頁一〇行、坂本上二七〇頁。迦葉に対する仏の言葉として、

so 'haṃ kāśyapaika-rasaṃ dharmaṃ viditvā yad-uta vimu=kti-rasaṃ nirvṛti-rasaṃ nirvāṇa-paryavasānaṃ nitya-pari=nirvṛtam eka-bhūmikam ākāśa-gatikam, adhimuktiṃ sat=tvānām anurakṣamāṇo na sahasaiva sarvajña-jñānaṃ saṃ=prakāśayāmi / āścarya-prāptā adbhuta-prāptā yūyaṃ kā=śyapa yad yūyaṃ saṃdhā-bhāṣitaṃ tathāgatasya na śaknu=thâvataritum / tat kasya hetoḥ / durvijñeyaṃ kāśyapa tathāgatānām arhatāṃ samyaksaṃbuddhānāṃ saṃdhā-bhāṣitam iti //

試訳

その私は、迦葉よ、同一味の法を知って、即ち(その法は)解脱味で、寂滅味で、涅槃を終局とし、常に寂滅し、同一の位のもので、空間に遍満するものであると(知ってから)、衆生たちの信解を見守りつつ、急には一切知者(=仏たち)の智を明らかにしないのである。迦葉よ。あなたたちは不思議の思いをし、未曾有の思いをしている。それはあなたたちが如来の saṃdhā-bhāṣita を理解すること (avataritum) が出来ないからである。何故かと云えば、迦葉よ、如来・阿羅漢・正覚者たちの saṃdhā-bhāṣita は知り難いからである。

什訳から必要の個所だけを引けば、

大正九・一九c。

汝等迦葉　甚為希有　能知如来　随宜説法　能信能受　所以者何　諸仏世尊　随宜説法　難解難知。(坂本二七二一三以下参照)

法訳には完全に脱ちている。

此の個所からは、羅什が saṃdhā-bhāṣita を saṃdhā-bhāṣya と同じに見ていると云うことがわかる以外、別に新らしい事は無い。(原文中、仏智と saṃdhā-bhāṣita の別は明らかであるが。)

(二) Ⅷ五百弟子受記品。ケルン本一九九頁一行、坂本中九二頁。

atha khalv āyuṣmān pūrṇo maitrāyaṇī-putro bhagavato 'ntikād idam evaṃ-rūpam upāya-kauśalya-jñāna-darśanaṃ saṃdhā-bhāṣita-nirdeśaṃ śrutvaiṣāṃ ca mahā-śrāvakāṇāṃ vyākaraṇaṃ śrutvêmāṃ ca pūrva-yoga-pratisaṃyuktāṃ kathāṃ śrutvêmāṃ ca bhagavato vṛṣabhatāṃ śrutvâścarya-prāpto 'bhūd ……

試　訳

そこで実に、マイトラーヤニーの息子である尊者プールナは、世尊のところで、此の上述のような善巧方便*と智見とのあるsaṃdhā-bhāṣita の説示を聞いて、また、これ等大声聞たちの授記のことを聞いてから、また、前世に関する説話を聞いて、また更に、世尊の此の偉大さを聞いて、不思議の思いに達した。さらに……。（*或いは「善巧方便の智見」と訳すべきか決定しがたい。）

什訳　大正九・二七b

爾時富楼那弥多羅尼子　従仏聞是智慧方便随宜説法　又聞授諸大弟子阿耨多羅三藐三菩提記　復聞宿世因縁之事　復聞諸仏有大自在神通之力　得未曾有　云云

法訳　大正九・九四b

……聞仏世尊敷闡善権示現方便授声聞決当成仏道追省往古所興立行　又瞻如来諸仏境界　得未曾有　云云

両訳とも原文に忠実でsaṃdhā-bhāṣita に就いても前と同様である。

㈢　X法師品。ケルン本二三三頁一一行、坂本中一五六頁。

tat kasya hetoḥ / parama-saṃdhā-bhāṣita-vivaraṇo hy ayaṃ dharma-paryāyas tathāgatair arhadbhiḥ samyaksaṃbuddhair dharma-nigūḍha-sthānaṃ ākhyātaṃ bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ parinispatti-hetoḥ /

試　訳

それは何故か。実に（その中に）最高のsaṃdhā-bhāṣita の開示のある此の法門は、如来・阿羅漢・正覚者たちが、法の秘密の事象であると、菩薩大士を成就させる為に、説明されたのである。

什訳　大正九・三一c

所以者何　一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提　皆属此経　此経開方便門　示真実相　是法華経蔵　深固幽遠　無人能到　今仏教化成就菩薩　而為開示。

法訳　大正九・一〇一c

所以者何　吾前已説　班宣此言　仮使有人　不楽斯経　則為違遠　於諸如来　此経典者　道法之首　衆慧之元　成就菩薩。

両訳とも丁寧に意訳しているが、問題の言葉は什訳では明瞭に「此の経は方便門を開き、真実相を示す」と訳している。彼によれば、saṃdhā-bhāṣita は方便門である。法訳には無い。

㈣　XⅢ安楽行品。ケルン本二八八頁一行、坂本中二六六頁。仏陀が文殊に言われる言葉に、

evaṃ cânena cittam utpādayitavyam / mahā-duspraj̃ā-jātiyā batême sattvā ye tathāgatasyôpāyakauśalyaṃ saṃdhā-bhāṣitaṃ na śṛṇvanti na jānanti na budhyante na pṛcchanti na śraddadhanti nâdhimucyante / kiṃ câpy ete sattvā imaṃ dharma-paryāyaṃ nâvataranti na budhyante / api tu khalu punar aham……

試　訳

彼はまた、このように心を発すべきである。「ああ、これら大悪慧の生の衆生たちは、如来の善巧方便である saṃdhā-bhāṣita を聞かず、知らず、覚らず、問わず、信ぜず、信解しない。また、これらの衆生は此の法門（＝法華経）を理解しないし、覚らない。しかし、そうであっても実に私は、……

什訳　大正九・三八c

応作是念　如是之人　則為大失　如来方便　随宜説法　不聞不知　不覚不問　不信不解。

法訳は理解しがたい。唯だ訳中に「善権方便演真諦誼」の文を見出す。

此の個所で重視せねばならぬ事は、法華経文中に、善巧方便と saṃdhā-bhāṣita とを同格に取扱ったものが此処にあることである。即ち、此の解釈は、法護・羅什両師の解釈から生じたのではなく、法華経自体にその考えが存在する事になるからである。

然るにケルンの訳は次の通りである。

To be sure, they are greatly perverted in mind, those beings who do not hear, nor perceive, nor understand the skilfulness and the mystery of the Tathāgata, who do not inquire for it, nor believe in it, nor even are willing to believe in it.

右の訳は upāyakauśalya と saṃdhābhāṣita をそれぞれ別のものと見ているが、原文に ca がないので疑問が生ずる。

C. Saṃdhā-vacana

この語は法華経中ただⅡ方便品の終りの偈文の中に見えるだけである。ケルン本五九頁一行、坂本上一三二頁。舎利弗に対する世尊の言葉として、

lajji śuci ye ca bhaveyu sattvāḥ
saṃprasthitā uttamam agra-bodhim /
viśārado bhūtva vademi teṣām
ekasya yānasya ananta-varṇān // 143 //
etā-dṛśi deśana nāyakānām
upāya-kauśalyam idaṃ variṣṭham /
bahūhi saṃdhā-vacanehi cōktaṃ
durbodhyam etaṃ hi aśikṣitehi // 144 //
tasmād dhi saṃdhā-vacanaṃ vijāniyā
buddhāna lok'ācariyāṇa tāyinām /
jahitva kāṅkṣāṃ vijahitva saṃśayaṃ
bhaviṣyathā buddha janetha harṣam // 145 //

試　訳

恥を知り、清浄にして、最上の頂菩提に出で立った衆生たちに、私は（説法に）確信をもって、一乗に就いての無限の称讃を述

べるであろう。（一四三）

このような、導師たちの説法、これは最も勝れた善巧方便であって、多くの saṃdhā-vacana を以って述べられ、これは実に無学の者には覚りにくいものである。（一四四）

それであるから、あなた方は実に、世間の師であり如実の存在者でもある諸仏の saṃdhā-vacana を知ってから、疑惑を捨て、疑問から離れて、将来、仏となるであろう。喜び〔を起し〕なさい。（一四五）

什訳　大正九・一〇b

有㆑慚愧清浄　志㆓求仏道㆒者㆒
当㆑為㆓如㆑是等㆒　広㆑讃一乗道㆒
舎利弗当㆑知　諸仏法如㆑是
以㆓万億方便㆒　随㆑宜而説法
其不㆓習学㆒者　不㆑能㆑暁㆓了此㆒
汝等既已知㆓　諸仏世之師
随宜方便事㆒　無㆓復諸疑惑㆒
心生㆓大歓喜㆒　自知㆑当㆑作㆑仏

法訳　大正九・七三a

仮使有人　慚愧清浄　発心志願　来尊仏道
聞大覚乗　無量之徳　諸仏聖明　則現目前
衆猛尊導　講法如是　善権方便　億百千亹
分別無数　無復想念　其不学者　不能暁了
由是之故　了正真言　正覚出世　順修明哲
断諸狐疑　蠲除猶象　能志欣勇　咸至仏道

什訳は前の通りであるが、法訳はこの語を「真言」と訳している。これは、仏の説く言葉の意味であろうか。方便品の「真法」の訳（ケルン三四頁九行）参照。

三　法華経における Saṃdhā-bhāṣya

この探究で得た最も大きな成果は、B・㈣安楽行品の中で、善巧方便と saṃdhā-bhāṣita とが同格に用いられている事実を見出した事である。これで、法華経作者の問題の語に対する真意が見極められるからである。そして此の事実によって法護は方便品の始めに於いて saṃdhā-bhāṣya を詳しく説き、羅什は諸所に於いて原文に無い方便の語を追加して訳しているのである。また、善巧方便の説法は、説かれる真理（仏の覚智、実智）と聞き手である衆生の理解力等とのにらみ合わせによって可能であるので、saṃdhā-bhāṣya は諸要素間の和解・和睦による説法の言葉（関係の諸事実をにらみ合せての説法）の意味で、詳しく言えば「仏が人々を解脱させる為に説く、種々な事情に順応した説法」と云うことになる。羅什の好んで用いる「随宜の説法」も此の意味に理解すべきものである。（羅什訳にある意趣と意もこの中に含まれている仏の意図を意味するものであろう。）

また、仏の真智は覚った時に知られるものであり、法華の立場では仏と仏とのみ談り合うことが出来るものであるから、極言すれば法華経の中にも saṃdhā-bhāṣya があってもよいし（此の意味でⅧ五百弟子授記品の初めを見よ。）、法華経の殆んど全部が saṃdhā-bhāṣya であるとも言い得よう。

この saṃdhā-bhāṣya が間違って解釈される一つの原因は saṃdhyā-bhāṣya との混同にある。エジャトンはその辞書の中で、これ等は一つの言葉であって、saṃdhyā- は誤りで、saṃdhā- が正しいのであろうとしている。私の見るところでは、仏教梵語の世界では言葉の音から見て此の二つの言葉は全く別で、到底混同し得ないものである。従って、saṃdhyā- が誤写から生じたものでなければ、これ等は起源を異にするものと考える。saṃdhyā- には「たそがれ」・「祈禱の時」等の意味があって、その時の言葉として saṃdhyā-bhāṣya が「密語」・「謎の言葉」の意味に取られるのであろう。とにかく、saṃdhyā- は密教関係に用いられるようである。また、アープテの辞書には saṃdhā- にも「たそがれ」の意味があるとしていて、若しこれが事実であれば、此の両語の持つ同じ「たそがれ」の意味から混同が生じたとも考えられるが、これにはなお、アープテの辞書の資料を再検討する必要があろう。要するに、これ等二語の問題は、それぞれの言葉の出て来る原典を調べ、年代をも考究する必要がある。saṃdhā- は古く、saṃdhyā- は新らしいとも考えられるからである。

法華経の saṃdhā-bhāṣya とそれに類する言葉は、原典にもそう訳す根拠があるのであるから、法護や羅什両師にならって訳すべきであるとの確信を得たのであるが、若しこれを別の意味に訳すとするならば、先づ両師の訳の不成立を証明しなければならぬと思う。

四　法華経以外の大乘経典における Saṃdhābhāṣya

「菩薩地」には saṃdhāya-vacana (Wogihara ed. p. 56-5, p. 108-24) と saṃdhāya-bhāṣita (do. p. 174-15) とがあって、問題の saṃdhā-bhāṣya と同意に用いられている。即ち、五五頁二四行に菩薩のことを述べて、

sa evaṃ vaśitā-prāptaḥ sarva-sattvataś ca śreṣṭho bhavati niruttaraḥ. evaṃ ca sarvatra-vaśinas tasya bodhisattvasya uttamāḥ pañc'ānuśaṃsā veditavyāḥ. paramāṃ citta-śāntim anuprāpto bhavati vihāra-praśāntatayā na kleśa-praśānta=tayā. sarva-vidyā-sthāneṣu câsyâvyāhataṃ pariśuddhaṃ paryavadātaṃ jñāna-darśanaṃ pravartate. akhinnaś ca bha=vati sattvānām arthe saṃsāra-saṃṣṛtyā. tathāgatānāṃ ca sarva-*saṃdhāya-vacanāṇ** anupraviśati. (*-vacanān!-vacanāṃ

と訂正して中性，複数と見る。）

試　訳

彼は、そのように自在を得、すべての衆生より勝れて、無上である。また、このようにすべての事柄に自在を得た菩薩には最高の五つの功徳があるのを知るべきである。彼は煩悩の寂静によらずに、僧院の（或いは安住の）寂静によって最高の心の寂静を得ている。また、すべての智（vidyā）の問題に於ても、彼れの碍りなく、清浄で、潔白な智見が活動し、また、衆生たちのために輪廻をめぐって疲れず、如来のすべての saṃdhāya-vacana（宜しきを得ての言葉）を理解する。

また、同書一〇八頁二三行に、

arthaṃ pratisaraṇ* bodhisattvo na vyañjanaṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ sarva-saṃdhāya-vacanāny anupraviśati.

（*pratisaraṃ を pratisaran と訂正．pr. pt., N., sg.）

試　訳

菩薩は文字ではなしに、意味を求めつつ、諸仏世尊のすべての saṃdhāya-vacana（よろしきを得ての言葉）を理解する。

また、saṃdhāya-bhāṣita は、同書一七四頁一一行以下に、

bhavati khalu bodhisattvasya gaṃbhīrāṇi parama-gaṃbhīrāṇi sthānāni śrutvā cetaso 'nadhimokṣaḥ. tatra śrāddhenâśaṭhena bodhisattvenêdaṃ prati saṃśikṣitavyam. na me

pratirūpaṃ syād andhasyâcakṣuṣmatas tathāgata-cakṣusâivânuvyavaharatas tathāgata-saṃdhāya-bhāṣitaṃ pratikṣeptum iti.

試　訳

実に、深遠で、極く深遠である問題（或いは事柄、sthāna）を聞いて、菩薩が心に信解しないことがある。その場合、信があって偽りのない菩薩は此の事に就いて、こう学び取るべきである。「盲目で、眼を持っておらず、ただ如来の眼によって従順に行動しつつある私にとって、如来の宜しきに従って述べられた言葉を（saṃdhāya-bhāṣitam）捨てることは適さわしくない」と。

菩薩地にある此の二つの語は Gerund の形をそのまま合成語に用いたのであるが、漢訳には荻原本の索引によれば「密意言」或いは「密意語言」と訳されている。

「入楞伽経」（南条本二三六頁一五行）に saṃdhyā-bhāṣya の語があるが、これは前後の関係から見て、saṃdhā- の誤写であることが明瞭であるが、この誤写が何時どう云う原因で起ったかはこれだけでは判断し難い。それには写本の比較研究が必要であろう。此の南条本の原文を訂正し訳してみると、次の通りである。

suvarṇaṃ vajraṃ ca mahāmate samadhāraṇaṃ kalpa-sthitā api tulyamānā na hiyante na vardhante / tat kathaṃ bālaiḥ kṣaṇikârtho vikalpyata ādhyātmika-bāhyānāṃ sarva-dhar=

māṇām asaṃdhā-bhāṣya-kuśalaiḥ /

試　訳

金と金剛とは、大慧よ、等しく保存されて一劫の間存在しても、計量されれば減りもせず、増しもしない。それであるのに、どうして、方便説法に精通しない凡夫たちは、内外の諸法に就いて刹那滅の意味を妄分別するのであろうか。

同経、求那跋陀羅訳（大正十六・五一二b）には

如金金剛、雖経劫数称量不減。云何凡夫不善於我隠覆之説。於内外一切法作刹那想。

同経、菩提流支訳（大正十六・五五九c）

大慧。（金）金剛住於一劫。称量等住不増不減。大慧。云何愚痴凡夫分別諸法言刹那不住。而諸凡夫不得我意。不覚不知内外諸法念念不住。

また「月灯三昧経」には次の文がある。すなわち sūtra-dhāraṇânuśaṃsā 品（Vaidya 本、一九五頁）に、

mahā'bhijñā-parikarma avivādena deśitam /

vivāde yas tu carati sôdgṛhṇan na vimucyate // 1 //

abhijñā tasya sā prajñā bauddhaṃ jñānam acintiyam /

udgrahe yaḥ sthito bhoti jñānaṃ tasya na vidyate // 2 //

bahavo 'cintiyā dharmā ye śabdena prakāśitāḥ /

yas tatra niviśec chabde saṃdhā-bhāṣyaṃ na jānati // 3 //

saṃdhā-bhāṣyam ajānānaḥ kiṃ saṃdhāya tu bhāṣitam /

adharmaṃ bhāṣate dharmaṃ dharmatāyām aśikṣitaḥ // 4 //

lokadhātu-sahasreṣu ye mayā sūtra bhāṣitāḥ /

nānā-vyañjana ekârthā na śakyaṃ parikīrtitum // 5 //

ekaṃ padârthaṃ cintetvā sarve te bhonti bhāvitāḥ /

yāvantaḥ sarva-buddhehi bahu-dharmāḥ prakāśitāḥ // 6 //

nairātmyaṃ sarva-dharmānāṃ ye narā artha-kovidāḥ /

asmin pade tu śikṣitvā buddha-dharmā na durlabhāḥ // 7 //

試　訳

一、大神通の修行は論争なき者によって説かれ、論争を行ずるものは貪著して解脱しない。

二、彼には神通・智慧・仏智は思議の対象ではなく、貪著に住するものには智は無い。

三、多くの不可思議な法が言説によって明かされたが、その言葉に執着するものは saṃdhā-bhāṣya を理解しないのである。

四、saṃdhā-bhāṣya が何を和会して（saṃdhāya）説かれたかを知っていないものは、法性を学ばず、非法を法と云う。

五、幾千の世界で、私が経中に説いた、文字を異にする一義は称讃しつくすことは出来ない。

六、すべての仏たちが説いた、ありとあらゆる多くの法は、一

句義を思慮することによってすべて修せられるのである。

七、一切法の無我、この句を学ぶことによって、意義に精通する人々には仏の法は得がたくはない。

月灯三昧経、那連提耶舎（尊称）訳（大正一五・五九一ａ）

神通本勝業　顕示無果報
悕果修諸行　取我想不除
所言神通者　仏智不思議
若住取着者　彼人無智慧
不思議諸法　音声而顕示
若執於音声　不達方便説
不暁方便教　靡知方便説
非法説為法　於法寧覚了

また同品の一九七頁

pratibhāsôpamā dharmā yair hi jñātāḥ svabhāvataḥ /
naîva te rūpa-kāyena paśyante buddha-vigraham // 30 //
avigraho hy ayaṃ dharmo nâtra kaś cana /
avigrahaś ca yo dharma eṣa buddhasya vigraha // 31 //
dharma-kāyena paśyanti ye te paśyanti nāyakam /
dharmakāyā hi saṃbuddhā etat saṃbuddha-darśanam//32//
pratitya pratinirdiṣṭā aprati pratideśitāḥ /
imāṃ gatiṃ vijānita śrāmaṇyena hi ye 'rthikāḥ // 33 //
aprāptiḥ prāpti nirdiṣṭā sattvānāṃ jñātva āśayam /
yo saṃdhābhāṣyôttarate na so kena vihanyate // 34 //
yasya bhoti mayā prāptam aprāptaṃ tena côcyate /
yena śrāmanyam aprāptaṃ tena śramaṇa ucyate // 35 //

試　訳

三〇、諸法は自性から「影」に等しいものであると知る人々は、色身をもって仏身を見ないのである。

三一、この法（＝仏身）は無体であって、それには体と云うものは何もない。無体である法、これが仏の体である。

三二、法身をもって見る人々は導師を見るのである。正覚者は法身である。これが正覚者を見ることである。

三三、（正覚者のことは）観対して説かれ（また）観対せずして（aprati）説かれる。沙門道を求めるものはこの道理（gati）を知るべきである。

三四、衆生たちの意楽を知って、得と非得が説かれ、saṃdhābhāṣya を理解する者は、誰れ（或は、何）にも打負かされないのである。

三五、「私は得た」と思うものは「その人は得ない」と云われ、沙門道が得られてないので、沙門と呼ばれるのである。

右漢訳は（大正十五・五九二ｃ）

若知諸法性　猶若諸影像

終不以色身　得覩於真仏
諸法無形相　求状不可得
如是無形法　即是仏法身
若人見法身　是名見導師
法身即正覚　如是名見仏
不得而示得　不得而説得
若欲求沙門　応当知此道
我已説真行　知衆生楽欲
若入秘密教　彼便無執着
若謂所証得　彼便無所克
此不得道果　故名非沙門

尊称はここで、始め「方便」と訳し、後には「秘密教」と訳しているが、後者は玄奘の「密意語」と同意義にみてよいのであろう。またマックスミュラーの「Vajracchedikā 金剛般若」(二三頁)には

na khalu punaḥ subhūte bodhisattvena mahāsattvena dharma udgrahītavyo nâdharmaḥ / tasmād iyaṃ tathāgatena saṃdhāya-vāg bhāṣitā / kolôpamaṃ dharmaparyāyam ājānadbhir dharmā eva prahātavyāḥ prāg evâdharmā iti /

脚注によれば、同博士の用いた両写本とも誤写があって玄奘訳によって訂正されたのである。そして saṃdhāyā vāg と切っているが、saṃdhāya-vāg とする方がよいと考えて訂正しておいた。

現存の金剛般若の漢訳七本中、羅什は「如来常説」(大正八・七四九b一〇)・菩提流支も「如来常説(同七五三b十五)・同別訳には「如来説」(同七五八a四)・真諦も「如来説」(同七六二c十四)・笈多訳は訳文不明(同七六七c二)であって、ただ義浄の訳には「如来密意　宣説筏喩法門」(同七七二b二〇)とあり、玄奘の大般若六百巻中(同七・九八〇c)にも「是故如来密意而説筏喩法門」とある。恐らくは玄奘・義浄ともに原本中に saṃdhāya-vāg の語を見たのであろう。

五　結　論

以上の資料を整理して結論を出すと次の様になる。玄奘は一貫して「密意言(説)」と訳し、義浄には「密意」の訳がある。尊称は「方便」とも訳し、「秘密教」とも訳す。彼等より以前の求那跋陀羅は「隠覆之説」と訳し、菩提流支は意訳か「意」の字を、法華経論の中には竺法護・羅什と同じく「随宜」の訳語を用いている。これらを整理すると尊称の一訳は竺法護・羅什と大体等しくて問題はない。然るに玄奘・義浄の「密意」等は尊称の一訳「秘密教」と等しく、求那跋陀羅の「隠覆之説」もこれに類する。菩提流支の「意」の訳は妙法華中(方便品、ケルン本三四頁九行)羅什が「意」をもって意訳しているのと同じである。

次にそれぞれの訳語の意味を推求してみると、先づ玄奘等の「密意」の「密」は秘と同じで「ひめる」・「人に隠してかたらない」の

意味で、「密意」は「意を秘めた言葉」の意味であろう。この意味で、「秘密教」は「秘密を説く教」ではなくて、「（意を）ひめた教」で、「隠覆之説」も「（意を）隠覆した教」とすることが出来よう。ところが語原 saṃ-√dhā には「秘める」、「隠す」の意味は無いのであるから、この「ひめる」意味は他の関係から来ているのであると見るよりほかはない。

ここで「意」の意味を辞典で調べてみると意味内容の意味はなくて、「こころばせ」「かんがえ」を意味する。これは名詞 saṃdhā にある意図の意味である。これに依ると、たとえば玄奘の「密意言説」は「本当の意味をひそめかくして説かない言葉」の意味ではなくて、「意図をかくして説く言葉」である。ところが saṃdhābhāṣya は直訳すれば、saṃdhā を「意図」の意味で説くならば、「意図の言葉」・「意図による言葉」、saṃdhāya-bhāṣya ならば「意図しての言葉」の意味で、これには「意図をかくす」意味はない。それは思うに、意図をもっての言葉はその意図を明かにしてはその言葉の効果は無いのであるから、説く場合にはその意図をかくさねばならない。またこう説こうと意図する以前にはすべての事情を斟酌して決めねばならない。すなわち随宜せねばならぬのである。

たとえば、仏には衆生に自分の覚った真理を説こうと云う考えは始めからあるのであるから、この言葉の意図は、真理を説こうという意図ではない。然し仏自身の覚った真理をそのまま説いては衆生には理解出来ないから、種々事情を斟酌してこう説こうと意図し、その意図をかくして、これが真実そのものであるとして、説かれるのである。これが saṃdhā-bhāṣya であり、最も簡単に云えば方便説法である。

この説法の場合、聞手がそこに疑問を生じ更に仏の意図を理解するようになれば、覚りの真理を更に追求しその理解に近づくことになるのである。こう考えれば中国の純正仏教に伝わるこの語の訳例は皆同意義となるであろう。

（この原稿は自分でも saṃdhābhāṣya の意味が判明せず研究しつつ書いたので、読みにくく、また欠点も多いことと思う。ここにおわびして、読んで下さる方々の好意ある御訂正をお願いする。）

六　附　記

印度の密教の Vajrayāna や Sahajayāna では saṃdhā-bhāṣā や saṃdhā-vacana が重要な役割を演じている。これはいまの課題と深い関係をもつが、この語は今までの研究によれば Hevajratantra（七、八世紀の作と推定）に始めて見え、abhiprāyika-vacana（言葉の表面に現れたものとは全然異った事物を現わす言葉）、或は neyārtha-vacana（その意味がさらに明示さるべき言葉）と同意義であるとし、従って辻直四郎博士の訳語のように「秘語」と訳すのが一番適している。

また右に挙られた言葉はそれぞれ純正大乗にすでにあったもので、

それを全然異った彼らの密教的意味で用いるのであるから、本研究対象から離れるものである。とくに純正仏教における saṃdhā-bhāṣya の意味を確定するにあたって、混乱をきたす恐れがあるので、ここでは論述しなかった。然し印度密教に関しては近年色々の出版や研究があるので、その書名と問題の言葉に関する個所を挙げておく。

一、D. L. Snellgrove: The Hevajra Tantra, A Critical Study. Part I. Introduction and Translation, Part II. Sanskrit and Tibetan Texts. (London Oriental Series Volume 6.) London, 1959. 特に Part II (Text) Part II 第三 Nidāna-sandhyā-bhāṣo 章。

二、辻直四郎・右書評。東洋学報第四二巻四号　批評と紹介（四三一—四四九頁）昭和三十五年三月

三、バッタチャリヤ著・神代峻通訳・松長有慶補註・高木訥元訳補・インド密教学序説。(Bhattācārya: An Introduction to Buddhist Esoterism.) 特に四三頁並に註記。

四、Agehananda Bharati: The Tantric Tradition. London, 初版一九六五年。特に第六章 On Intentional Language (Sandhā-bhāṣā)。

今までの研究では印度密教の用いる言葉が saṃdhā- なのか saṃ-dhyā-なのか、この問題がまだ最後的には決着していない。saṃdhā-としてもその意味が種々に解釈されている。西蔵訳も二様で、dgoṅs paḥi skad（薄明の言葉）と gaṅ baḥi skad（秘密の言葉）とがある。

（最後にこの研究に当って立正大学の中村瑞隆教授並に私と種々研究を共にしている大正大学の斉藤光純講師と同高橋尚夫助手、立正大学大学院のナレーシ・マントリン修士の諸氏が一部資料を提供して下さった。ここに記して御礼にかえる次第である。）